

短小包莖早漏ふたなり女騎士と根暗な魔女 第二話

（あらずじ）

ふたなりと少女だけが暮らす国での物語。

少女達で構成されたラグノル王国の騎士団長セリアは、周囲の人々から尊敬を集めている。

しかし、彼女には大きなコンプレックスがあり、それはその下半身に生えているペニス  
が他の人と比べても小さく、皮を被っているということだった。

この世界においてペニスの大きさはそこまで重要なことではないのだが、厳格な家庭で  
育てられた生真面目なセリアは、幼いころにからかわれたその自分の数少ない欠点によっ  
て自信を失い、この国では当たり前のように行われているエッチに参加することができな  
いでいた。

そんなある日、セリアは何度か一緒に仕事をした魔女であるティナのもとにおちんちん  
を大きくする薬を求めて訪ねていく。

それを作るのは難しいと宣言されて落ち込むセリアだったが、代わりにティナからはお  
ちんちんを大きくするための訓練と称してエッチを提案され、彼女との快楽に溺れていく

のだった。

（登場人物紹介）

【セリア】

金髪の長い髪に、切れ長の青い瞳の美少女。

この国で一番の誉れと呼ばれるほどの実力と人格を兼ね備えた女騎士。

ふたなりであり、そのペニスが他人と比べて小さいことに劣等感を抱いており、それを解消するために魔女であるティナの下を尋ねた。

結果的にそれを何とかすることに至らなかったが、初めてのセックスの快感を覚えてしまったセリアは、最早その快感なしでは生きられなくなってしまった。

【ティナ】

ラグノル王国の魔導師団に所属する魔女。

黒髪にぼさぼさの髪の毛、何処か陰気な雰囲気か漂っているが顔立ちを整っている美少女。

魔法使いであり同時に魔女であり、そのため魔女達の夜会と称した乱交によって処女を失っている。

人と話すのが得意ではなく、基本的には一人で過ごすことを好んでいる。セリアに対し

ては何度か任務を一緒にこなしている間に憧れのような感情を抱いていた。  
セリアがティナを頼ってくれたことが嬉しくて、勇気を出してエッチに誘ってみたところ彼女をドハマりさせてしまう。

〔本編〕

夕暮れの街を、セリアは辺りを注意深く見渡しながら歩いていた。

ラグノルの王都は石造りの街並みが広がっており、大通りには幾つもの商店が立ち並ぶ。街はもうすぐ夜が来るにも関わらず活気に溢れていた。

近くの野菜を売っているお店に入り、既に顔馴染みとなった少女に挨拶をする。

「調子はどうだ？」

少女は憧れのセリアが尋ねてきたことに、顔を明るくさせて答えた。

「いい感じですよ。最近はお客さんも多くて、セリア様が尋ねてきてくれるおかげかも知れませんね！」

「わたしにそこまでの力はないよ」

そう言って軽く微笑む。それだけで野菜売りの少女は顔を赤らめて夢見心地になったの

だが、当のセリアは全くそれに気付いていなかった。

「何か変わったことは？」

これをセリアが尋ねるのは、既に何度目かのことだった。

明るく周囲からの評判も良く、更に彼女はとても淫乱でこの周りに居を構えるふたなりの少女達と頻繁に乱交をしているらしく、それ故に世間話と言う名の情報も数多く寄せられている。

もっともそれらは本当にただの噂話だったりもするので、ある程度は精査しなければならぬものも事実なのだが、以前彼女からの情報を頼りに犯罪を検挙したこともある。

「んー、最近は特にないですね……。先週、二個隣のお店に泥棒が入ったみたいですけど、すぐに捕まったようですよすし」

「ああ、それは聞いている。……そうか、何もないのなら何よりだ。もし何かあったら教えてくださいくれ」

言いながら店内を物色して、適当な野菜を購入する。

袋に入れてくれたそれを受け取ろうとすると、少女が熱っぽい目でセリアを見つめていた。

「セリア様。わたし達、今夜もみんなで集まるんですけど……よかったご一緒にごうです

か？ セリア様ってふたなりなんでしょう？ きっと遅しいおちんちんで、みんなに歓迎されると思っています」

「……いや、わたしは遠慮しておく」

当然彼女は素知らぬことだが、セリアのおちんちんは遅しいとは真逆だ。少しだけ傷ついたが、まさかこちらを慕ってくれている少女に対して怒りを向けることもできずに、セリアは店を後にした。

袋をもって通りを歩きながら、セリアは悶々と思考する。

（乱交かあ……大勢でエッチするのは楽しそうだな……。騎士団の者達も頻繁にやっているようだし……）

一応、性欲が強いふたなりのために騎士団など国家の機関に属するふたなり少女達は任務中は性欲抑制魔法を掛けているのだが、それでも頭の中の妄想は止めることはできない。（ティナと一緒に参加するのなら……いやいや、そんなことをしたらティナが取られてしまう。わたしなんかのおちんちんよりも、他の大きなおちんちに責められた方が気持ちいいだろうし）

などとそんなことを心配しているのだが、実際のところこの国において乱交は一般的なもので、特定のパートナーとしかエッチをしない方が珍しい。

勿論それとは別に恋人同士になるという関係もあるにはあるのだが、セリアとティナの仲がそこまで進んでいるとはいいい難かった。

(……他の人とティナがエッチをする……もしかして今も……)

などと、そんな不安がセリアの胸中に去来する。

コンプレックスのあるセリアはともかく、ティナは健康的な女の子だ。特にふたなりでない女の子は彼女達に誘われたときに断るのは難しい。ティナが他の女の子とエッチをしていない保証などはない。

そう考えると胸が苦しくなるが、同時にセリアは不思議な高揚感も覚えていたのだが、今はそれに気付かないふりをした。

「……馬鹿なことを考えるな」

小声で呟いて自身を鼓舞する。

なんにせよ今は任務中だ。余計なことは考えるべきではない。

そこで考えを切り替えられるのもまた、セリアが騎士団長であり周りから尊敬される理由の一つだった。

その後も見回りを続けて、一軒の軽犯罪(街中での性交)を補導してから騎士団の宿舎へと帰還する。

入り口では同じように任務を終えて戻ってきた部下達が、セリアを見て一斉に声を掛けてきた。

「セリア様、お疲れ様です」

「ああ、みんなもご苦労様。後は報告書をまとめて、早めに休んでくれ」

「はい！ あの、それでセリア様……よかったら一緒に風呂、どうですか？」

そうやって誘われるのもほぼ毎日のことだった。

「いや、すまないが今日は終わってから行くところがある。わたしのことは気にせず、みんなで楽しんでくれ」

そう言って、セリアは颯爽と去っていく。こうやって彼女に断られるのは毎度のことなのだが、少女達の憧れが尽きることはない。何とかセリアとエッチをしてみたいと思うのが、女心と言うものだった。

「なんかセリア様、様子が変じゃなかった？」

「そう？」

セリアが去った後、騎士達は噂話を始める。幾ら騎士として日ごろから厳しい訓練や戦いに身を投じていても、やはり少女達である。

「それに予定があるって言うのも珍しいよね」

「言われてみればそうかも。セリア様、明日は非番だから何処かに出かけるんじゃない？」  
「夜から？ ……ひよっとして、恋人でもできたのかな？」

「でもセリア様だよ？ 恋人は愚か、エッチしてるところも誰も見たことがないのに」  
「じゃあエッチなお店とか？」

少女達は様々な噂を立てるが、結局それらが何かの結論に辿り着くことはなかった。もとより彼女達も、セリアのプライベートの秘密を本気で解き明かそうとしていたわけではない。

次第に性欲抑制魔法が解けていき、一人が我慢できなくなった辺りで少女達は嬌声響く風呂場へと向かっていく。それによって今の話題はすっかり忘れ去られることになった。

同じ日の昼頃、ティナは王国内にある魔法研究所にて薬学の研究を行っていた。

彼女がいる部屋は薄暗く、日の光もカーテンの隙間から入る程度しかない。これは別に魔女がそう言った場所を好むとかそう言うわけではなく、単純に光によって変質してしまう薬品などがあるのでその影響を抑えるためにそうなっている。

ティナはその場所がお気に入りだった。

木製の机の上に置かれた葉草や、調査中の液体が入っているピーカーなど様々な調査、実験のための器具がティナの癒しでもある。

本を片手に幾つかの葉草を混ぜ合わせ、少し振ったり魔法で指先に灯した火で焙ったりして様子を見る。魔力を与えたり、薬品に対するアプローチは数多く、それらを一つずつ丁寧にこなしていった。

こんこん、と部屋の扉がノックされる。

ティナはその音にすらびくんと身体を硬直させて、恐る恐る声を出した。

「ど、どうぞー……」

消え入りそうな声だったので相手に届いたのかは定かではないのだが、そもそもこの部屋に入る際には大抵の人がティナがそうであることを知っているので、ノックをして別に答えなくても数秒後には入ってくるというのがお決まりになっていた。

「……魔導師長……?」

入ったきた人物を見て、ティナは目を丸くする。

前髪を綺麗に切り揃えた黒髪をツインテールにした少女の名は『クラリス』。身長はティナとそう変わらないが、スタイルはよく特に胸が大きくて人の目を惹きつける。切れ長の

鋭い瞳は彼女の嗜虐性を表しているようで、ティナは見つめられるだけで責められているような気分になってしまふ。

「魔導師長だなんて、クラリスと呼んでちょうだい」

「は、はい。クラリス……様」

クラリスは無遠慮に部屋の中に立ち入ってくるが、当然ながらティナはそれを止める術はない。彼女は魔導師長の名の通り、この国にいる全ての魔導師や魔女を統べる立場にあるのだから。

「きよ、今日はどうしたんでしょうか……？」

「貴方の夜会への参加の少なさが問題になっていてね、その忠告が一つ」

その言葉に、ティナは身体を縮こませた。

夜会と言うのは、魔女達が魔力を増強させるために行う集会のことだ。一応会議やお互いの研究成果の披露なども名目としては挙げられているのだが、その実態は乱交パーティのことである。実際、ふたなり少女の精液に含まれる魔力は膨大で、魔女達はそれらを力の源にしているのだから、乱交こそが最も価値のある行動であるのは事実だった。

しかし、ティナはあまり夜会には興味がない。別にエッチが嫌いなわけではなく、単純に大勢の人がいるところにいるのが苦手なだけだ。しかも夜会の映像は魔法によって記録

されるので、様々な痴態を晒させられてそれらが永久に残り続けることになる。

現に、ティナが処女喪失したときの乱交はそれなりの価格で取引されているという噂を聞いたことがある。

この国の常識としては別に気にする人はあまりいないし、むしろ自分の痴態が多くの子女達に使われているということは誉れですらあるのだが、ティナは何となく分不相応に感じてしまい気が引けていた。

「え、あ、あの……」

「……まあ、これは一応伝えに来ただけよ。別に夜会は強制じゃないから、来なくても何もペナルティはないわけだし」

「……うう、はい」

クラリスの迫力も要因の一つではあるのだが、ティナは単純に对人能力がない。なので、基本的に人と話すときは頷くか唸るか首を振るかぐらいしかできなかつた。セリアとあれだけ喋れたのは、ティナにとっては勇気を限界まで振り絞ったうえでの奇跡のようなものだった。

薄暗い部屋の中をクラリスは我が物顔で闊歩し、ティナの目の前までやってくる。

座ったまま彼女の方を見ると、その格好に思わず息を呑んだ。

魔女達の服装は騎士団とは違い、鎧などは着こまない。極薄の布でできた下着のような恰好を多くのが好んで着ている。それらは決して趣味と言うわけではなく、魔力が込められた布で編まれているのでそれなりに防御力があり、魔力が集めやすいような作りになっているからだ。

なのでティナも一応はそういう格好をしているのだが、あまり露出をしたくないのでワンピースタイプの胸やおへそ、股間を覆うタイプを着用している。

一方のクラリスはスケスケの黒い下着のような服装で、目を凝らせば彼女の丰满な胸の先端や股間まで丸見えになってしまうほどの過激なものだ。

そしてクラリスはふたなりなので、その小さな布面積からは彼女のおちんちんの先端がはみ出してしまっていた。

「でもあまりみんなにお預けするのもいいことではないわ。貴方は貴重なふたなりじゃない女の子なんだし、あんまり我慢させると、襲われちゃうかも知れないわよ」

「で、でもわたしなんか……ひゃあうっ」

クラリスの手が胸に伸びてきて、思わずティナは嬌声を上げてしまう。軽く揉まれただけなのに、そこから電撃のような快感が全身に伝わっていた。

(クラリス様……魔力を込めてるから、凄く感じちゃう……♡)

「とにかく、強制ではないけれど適度に発散させてあげた方がいいわ。同じ魔女なんだし、そのぐらゐの融通は利かせても罰は当たらないと思うわよ」

「……は、はい……」

消え入りそうな声で返事をする。

クラリスはその件に関してはそれ以上追及するつもりはないようで、一瞬表情を緩めた。本当に、言われたから伝えに来たと言った感じなのだろう。

「それからもう一つ、予算追加の件なのだけど」

「は、はい。でもそれって経理部の人じゃ……」

「忙しそうだったから、わたしが代行しに来たのよ。権限はあるのだし、問題ないでしょう？」

ここで問題があると言える人物をティナは知らない。こくこくと頷く。

「先日急に薬学についての追加予算の申請があったから、何事かと思ってね。普段はそんなことは滅多にないわけだし」

「あ、はい。あの、ちょっと新しく研究してみたいものがありました」

「ええ。報告書に書いてあるわね。おちんちんを永続的に肥大化させる薬でしょう？ これまで何度もアプローチされていた分野ではあるけれど、どれも一時的なものに落ち着いて

いるわよね」

「は、はい」

「そもそもこの分野が発展しなかった理由は理解しているわよね？」

クラリスの鋭い視線が向けられる。

「ひ、必要なかったからです」

実際ペニスを大きくして快感を得たいのなら、一時的に大きくするだけで充分だった。日常的には大きい方が不便も多いので、自分のおちんちんを常に肥大化させたがるふたなり少女は少ない。

「で、でもその……学術的興味と言いますか……あの、それはそれで需要はあるんじゃないかと、思っています……」

頑張ってプレゼンしようとして試みるが、当然ティナにそんな能力はない。それができれば、こんなところで一人で研究を続けてはいない。

「そんなに必死にならなくても大丈夫よ」

意外にも、クラリスは優しい口調でそう言った。

「え？」

「元々貴方は研究職に近いし、ここで治療ポーション作成の効率化について研究を続けても

限度があるだろうし」

今日までのティナの仕事は治療ポーションを作る材料辺りの効果を少しでも良くするとうものだった。最初こそ10%ほどの効率化に成功していたものの、最近ではそれも限界に達していて、一年研究して小数点以下程度の効果しか得られていない。早い話が閑職だった。

「い、いいんですか？」

「そうね。ただし、予算委員会に提案して通すにはそれなりに苦労が必要な。貴方できる？」

ぶるぶると首を横に振る。そんなことは、ティナが最も苦手とする分野だ。

それを見たクラリスの表情が一変し、股間のおちんちんがむくむくと膨らみ始めた。

「だからここは交換条件と行きましょう。多少の無理は通してあげるから、貴方はその分わたしに報酬を渡す。いいでしょう？」

「ほ、報酬って……あ」

視線を下におろし、すぐに気が付いた。

既にクラリスのおちんちんは臨戦態勢になっており、下着からはみ出して真っ直ぐにティナの方へと向けられている。

その大きさは元からは比べ物にならなぐらいに肥大化しており、先端も皮がずる剥けで膨らんだ亀頭がびくびくと震えている。

(おっきい……。セリアのとは全然違う……。♡)

セリアのことを思うと心に僅かな棘が刺さったような痛みが走るが、これもまた彼女のためだと自分に言い聞かせる。何よりも所詮は女であるティナは、目の前にぶら下げられた巨大なおちんちんに逆らうことなどはできそうになかった。

連れていかれた先は、所長室と呼ばれるクラリスが普段仕事をしている部屋だった。

部屋の中は落ち着いた家具で彩られており、彼女が仕事をする机の上には大量の書類が置かれている。

部屋の隅にはご丁寧なベッドが置かれていて、そこで何が行われているのかは明白だった。

とは言え別にクラリスは権力を乱用して手当たり次第に少女を食べているわけではない。魔導師長として尊敬される彼女に抱かれるということは喜ばしいことであり、多くの少女



達は自分の番を今か今かと待ち望んでいるほどでもある。

「それじゃあ早速だけど、脱いでもらおうかしら？」

言われるままにティナは裸になる。同じようにクラリスも全裸になって、ベッドの上で両足を広げていた。

彼女が何も言わずとも、ティナはベッドの上りクラリスの硬く勃起したペニスに舌を這わせる。

「ん、れろっ♡」

「はあ……♡」

ティナの舌がペニスを這いまわると、クラリスは快感の声を上げる。

「れろっ♡ れるっ♡ んちゅっ♡ れえええ♡」

唇でキスをしたり、舌を動かしてペニス全体を刺激していく。

クラリスは満足しているようで、時折気持ちよさげな声を上げながらティナの頭を優しく撫でてくれた。

「ふう、ああっ♡ 貴方、あまり経験がないわりに上手ね……あんっ♡」

張り出した亀頭を舌先でつつくと、クラリスが可愛い声上げる。そこには魔導師長としての威厳はなかったが、むしろ親しみやすい愛らしさがあった。

「ふ、んっ♡ ああんっ♡ ティナ、ほら、先っぽにキスをして」

「ふあい……ん、ちゅっ♡」

突き出されたおちんちんの先端、精液が出てくる穴の辺りに軽くキスをする。

そのまま何度も何度もティナの柔らかい唇でペニスの先っぽを刺激してあげると、ほどなくしてトロっとした液体が染み出してきた。

「我慢汁もちゃんと舐めとりなさい」

「ふあい……♡ ちゅるるっ♡」

溢れてきた先走りの汁を言われるがままに舌で舐めとる。

ふたなり少女の精液と同じようにほんのりと甘く、少女達を発情させる香りがする独特の液体を口内に招き入れ、ティナの身体は本人が望まずとも熱くなっていった。

「んっ、はあ……♡ あっ、いい♡ ティナ、貴方も発情してきているのね」

四つん這いになり、顔をクラリスの股座に埋めながらティナは無意識のうちにねだるように腰を振っていた。

少しだけセリアに対して罪悪感が湧くが、それもすぐに消える。目の前に突き出された巨大な肉棒を前にして、雌の本能を抑えきれぬ少女などいるわけがないのだから。

「はむっ、ちゅるるっ、ぺろれろお♡ ちゅぽ、ちゅぽ♡」

「あああつ、上手よ……♡ んっ、はぁ♡」

クラリスも喜びの声をあげながら、細かく腰を動かしてもどかしいようにティナの顔におちんちんを突き付けてくる。

ティナはまだ焦らすように、クラリスのペニスに舌を這わせ、全体を掃除するように舐めあげていた。

「べろお♡ れろれろお♡ ちゅぱ♡ ぢゅるるるっ♡」

「んっ、いい♡」

どうやら唇で吸われるのがお気に入りのようで、それをしてあげるたびにクラリスは歓喜の声をあげながら身体を震わせる。

やはりこうやって交わっている間は、お互いに愛情のようなものが芽生えるものだ。彼女が自分の舌技で喘ぎ、快感を得ていることがティナには嬉しいことのように感じられていた。

ふと見上げると、クラリスが切なそうな顔でこちらを見下ろしている。

そこには魔導師長としての威厳などはなく、ただ一人のふたなり少女としての本能をむき出しにした、ペニスが付いているだけの雌の姿があった。

「んっ、そろそろ……啞えますね」

「ええ。お願いね」

「あああむ♡」

大きく口を開けて、クラリスのおちんちんを頬張る。

彼女のそれはセリアのものとまるまるとは違う大きさで、本当に同じ種族の同じ器官であるのかと疑ってしまうようなものだった。

もっともそれに關してはクラリスのものが大きいのは元より、セリアのそれが人よりもかなり小さいからと言うのもあるのだろうが。

(すごっ……口の中いっぱいになって……♡)

「ぢゅぽ、ぢゅっぽおお♡」

頬を窄めて、一気にペニスを吸い上げる。

クラリスの肉棒は口の中で更に大きくなり、それを舌で撫でてあげると喜ぶようにびくびくと脈動していた。

「おおおっ♡ 貴方、本当に上手……♡ あんまり夜会に顔を出さないのに、何処で学んできたの……はうっ♡」

「ぢゅろろろっ♡ ぢゅぽ、ぢゅぽ、ぢゅっぽ♡」

顔を前後に動かして、口の中と喉の入り口でちんぽを刺激する。そうでもしなければ収

まり切れないほどにクラリスのペニスは大きい。

「ふっ、あつ、あつ、そこ、そこいいわ♡」

舌で思いつきり亀頭を撫でまわすと、どうやらクラリスはそれがお気に召したようだった。ティナの頭を手で固定し、ちょうど亀頭を刺激できる辺りで腰を小刻みに震わせる。

「んぐっ、ちゅぽ、ちゅぽおほ♡」

「あ、はあ……♡ あんっ♡ ひい♡ 貴方のお口、本当に気持ちいいわね……♡ これからわたし専用の口まんこにしようかしら♡」

その言葉に、ティナは一瞬動きが硬くなる。

専用になどされてしまっでは、セリアとエッチをすることができなくなる。そしてそれができるだけの権力と力を持っているのが、クラリスと言う少女だった。

「あはっ♡ 少し動きが鈍ったわね♡ 安心して、そんなことはするつもりもないわ。こうやって定期的に使わせてもらえればね」

「んぶっ、んぼっ、ぐっぽおおほ♡」

感謝の印にと、一生懸命に奉仕をする。

どうやらクラリスも限界が近くなってきたのか、ティナの口の中でただでさえ大きな彼女のおちんぼが、更に肥大化していった。

「うっ、はあ、はあ……そろそろ、イクわ。何処に出してほしい？」

「むごっ、もごっ♡ ぢゆるるるっ♡」

ティナにとってその質問は無意味だった。なのでできるだけ早く射精してもらうために奉仕の勢いを強めていく。

「ふふっ、わかっているわよ。貴方に選択権なんてないものね……あっ♡ ……イクわよ、ほらっ、ほらあ♡」

「むごおおおおお♡」

ティナの口の中で、これまでにないほどの大きさにおちんちんが膨れ上がった。

次の瞬間、まるで洪水のような量のザーメンが噴出する。

当然それはティナの口内で放たれたので、そのまま抵抗することを許さず一気に喉奥へと濃厚な液体が滑りこんでいく。

「おごおっ♡ むぐううっ♡」

口の中を肉棒に占拠されたまま、ティナはその大量の欲望の塊を喉と胃で受け止めることしかできない。吐き出すこともできず、ティナの意思など無視してそれらは彼女の体内を汚すために胃の中に落ちて溜まっていく。

口内と胃の中をどろどろとした精液が駆け巡るたびに、ティナは自分の身体も強く疼い

ていることを自覚していた。

ぼたぼたと胃の奥に濃厚ザーメンが落ちていく感触を受けると、ティナのアソコはひくひくと震えて、じんわりと熱を持っているのがわかる。

クラリスはそれがわかっていいのか、片手をあげると魔法を発動させる。

「ひゃ……！」

ティナの身体が軽く浮かび上がり、今度はクラリスの間前で両足を広げるような形でベッドの上にふんわりと降ろされた。

「今度はわたしが気持ちよくしてあげる」

「い、いえ、あの、だ、大丈夫ですから……」

「遠慮しなくていいのよ」

遠慮をしているわけではない。今この状態でおまんこに刺激が来たら、ティナは激しく乱れてしまうだろう。何となく、それをセリア以外の前で見せることに躊躇いがあった。別に彼女と恋人になったわけではないが、裏切ってしまうような気がしたからだ。

しかし、クラリスは非情だった。両足を開いたままのティナの蜜を垂らすおまんこに顔を近づけると、一気に吸い付くように激しく舐め始めた。

「ひゃああああああ♡」

絶叫を上げて、ティナが身体をひくつかせる。

クラリスの舌技はかなりのテクニシャンで、ティナの反応を見ては彼女が弱い場所を的確に責め立ててきた。

「はひっ、クラリス様……♡ はひい♡ だめっ、そこっ♡ いい、気持ちいいっ♡」

溢れる愛液を啜り、舌で弱い場所を乱暴に愛撫する。

そうされているだけでティナはアソコから全身に向けて電気が走り、瞬く間に絶頂を迎えていた。

「ひいあああああっ♡ い、くっ♡」

びくんっ、びくんっ！

ぷしやあああああ！

ティナのおまんこから大量の潮が吹き出して、クラリスの顔を汚していく。

「す、すみませ……あひい♡」

クラリスはまだティナに対する攻勢を緩めることはなく、彼女の口はティナの大切な場所を容赦なく蹂躪しては快感を与え続けていた。

「あ、あ、あ、ああっ♡ だめですっ、だめえ♡ また、イクっ♡」

「ふふっ、相当おまんこ弱いのね……。貴方、やっぱり素質があるわ」

「そしつ……？ ああああっ♡ わかんないですっ♡ そんなの、わかんないいいいい♡」

身体を震わせ、快感を逃がすように反り返りながら二度目の絶頂を迎える。

ぶるぶる震える肉付きのいい太ももをクラリスは抑えるようにして、ようやくティナの股間から顔を上げてくれた。

ティナから噴出した愛液でべとべとに汚れた唇を舐めて、クラリスは蠱惑的な笑みを浮かべてティナを見つめている。

ベッドに押し倒され、無抵抗のままティナはクラリスの愛撫を受け入れることになった。押し掛かれるような体制のまま、片手で胸を揉まれ、もう片方の手の指はクラリスのアソコに遠慮なく突き立てられている。

「あひっ、あっ、あっ、あああっ♡」

「あはっ、貴方のおまんこ流石ね。一気に三本も入っちゃった。これならわたしのも簡単に入りそう」

ティナが視線を降ろすと、クラリスとティナの間には圧倒的な存在感を誇る彼女の肉棒があった。赤黒くごっごっして、血管を浮かばせながらびくびくと震えるそれは凶器のようにも見えるが、ティナはそれが少女を気持ちよくしてくれるための器官であることを知っ

ている。

その大きさは指三本どころではない。あれを入れられたらどんなことになるか全く予想がつかない。

(あ、あんなの入れられたら……気持ちよすぎて死んじゃうかも)

ぐちゅりと水音がして、クラリスの指がティナの気持ちのいい場所を刺激する。

「ひいりん♡ あひっ、あっ、あああっ、んんんっ♡」

三本の指がアソコを広げるように動き回り、同時に胸を強く揉みしだかれそこから快感が走る。

二か所から同時に浴びせられる雷のような快楽に、ティナは成すすべなく身を任せることしかできなかった。

「さ、もう一回イキましようね。このぐらいほぐしておかないと、きつすぎるから」

「あひっ、あはあ♡ はひいひい♡ い、イクっ♡ また、イキますっ♡ クラリス様の指で、イカされるう♡」

「ええ、ほら、イきなさい！ 潮を噴いて、無様にわたしに服従するのよ！」

クラリスのサディスティックな一面が垣間見え、彼女は片手でティナの乳首を強く摘まむ。

「ひゃあああっ♡ やめっ、駄目ですっ♡ もう許してえ♡」

「駄目よ。ほら、イけ、イけっ♡」

「はいいい♡ イきましゅっ♡ イきましゅからああああ♡」

もはや呂律も回らなくなり、ティナは呆気なく今日三度目の絶頂を迎えていた。

身体が大きく跳ねあがり、アソコからは大量の甘い蜜が溢れてベッドの広範囲を濡らしていく。

そのまま全身の力が抜け、あわや失禁までしそうになったところでぎりぎりティナはそれに耐えることができた。

「は、ひい……はっ♡ はっ♡」

荒い息を吐くティナだが、目の前にいる少女の眼光がまだことが終わっていないことを告げている。

「それじゃあそろそろ、本番と行きましょう」

「あ、あの、わたしは、もう充分……」

膝立ちになり、目の前にクラリスが迫る。

ぶるん、と差し出されたペニスには赤く脈打つ凶暴な形をしており、それに逆らうという想像すらもできないような圧倒的な形をしていた。

「あら、貴方の意思なんて関係ないわよ。わたしが気持ちよくなるためにやっているのだから」

考えてみれば当たり前のことなのだが、改めてそれを口に出されてティナは絶望する。「ほら、お尻をこっちに向けなさい。たっぷり可愛がってあげるわ」

ティナに逆らう権利などはない。言われるままに後ろを向いて、入れやすいようにお尻を高く上げることしかできなかった。